●研究発表要旨●

舞踊用語に関する研究 III

—— 批評・紹介記事の意味微分 ——

松本千代栄　厚母宗子
桑原和美　佐々木昌代

〈研究目的〉

研究I，IIに引続き，舞踊に対する言語上の接近の様相を解析し，舞踊の特質と成立の諸条件——表現と伝達（作品—鑑賞）の機制——を明らかにしようとするものである。

〈研究方法及び対象〉

下記の新聞紙上に掲載された舞踊（モダンダンス）に関する記事について

（1）先に行った研究I，II（舞踊学2号）と同じく用語を抽出，類別し，分類表を作成して，批評・紹介記事に表われた舞踊用語の実態をみた。

（2）更に，批評・紹介記事（601作品）の文章について意味を微分し，言語上に表われた舞踊の構造・機能特性を弁別した。即ち，舞踊の構造・機能を，[1]主題 Theme or Original Plan [2]身体 Body [3]運動 Movement [4]変化 Variation [5]連続 Sequence [6]群 Group [7]構成 Composition [8]作品 Artistic Work 及び [9]美的形成原理 Aesthetic Principle [10]情調 Feeling Value [11]効果 Stage Effect, Music or Sound に要素化し，それを成立させる [12]作者 Choreographer [13]演者 Dancer [14]公演 Dance production [15]観者 Audience or Critic の要素を外廓に配して，舞踊作品と鑑賞のメカニズムを仮説的に設定し，（図式化）批評・紹介記事の意味微分を集積して各要素の相互連関をみ，「構造・機能と要素化」の妥当性を検証した。（図式は学会発表資料 P.17 参照）

批評・紹介記事は，①作品そのものに対する直接的な記述と，②地域的，歴史的に社会文化 Social Culture をふまえて間接的に述べられたものとに分け，公演予告は除外した。

対象記事は，一般紙（朝日新聞），専門紙（オン・ステージ新聞）昭和52年1月～54年12月の舞踊批評・紹介記事総数284篇（601作品・批評記事187，執筆者12名）

〈結果と考察〉

（1）舞踊用語については：抽出した用語総数2811語の中，頻数5以上の項目についてみると，[1]テーマ(98) [2]動き(185) [3]群舞(35) [4]構成(382) [5]振付(130) [6]作品(620) [7]衣裳・照明・道具・装置(162) [8]音楽(145) [9]ダンサー(400) [10]公演(318) [11]振付者(147) [12]観者(189) の分野に類別され，一般に同義語が多様化する傾性が認められた。〝動き〟についての技術用語は分化しないが，〝ダンサー〟（肉体，動き，技術，演技，表現，個性，素質など），〝構成〟（展開，シーン，全体，部分，ラスト，オープニングなど），〝作品〟（小品，ソロ，デュエット，トリオ，仕上り印象，配役など）の用語にはひろがりが認められた。（以下省略，発表資料 P.5～16 参照）

（2）意味微分により舞踊の構造・機能特性をみた結果では：図1—運動の要素に示すように，〝運動の要素〟は，身体と運動（B－M, B－M－FV），運動と変化（M－V），運動と連続（M－S, M－S－FV），主題と運動（T－M），運動と情調（M－FV）と結びついており，「舞踊運動形成の機能」を示すと認められる。

構成・群の要素は，図I—構成・群の要素に示すように，主題と構成（T－C, T－M－C），運動と構成と視聴覚効果（M－C－SE），構成と作品（C－W），構成と群（C－G），構成と変化（C－V, C－V－FV），構成と情調（C－FV）などと結びつき，「全体構成の機能」を示すと認められる。

作品の要素では，主題と作品（T－W），作品と構成（W－C），作品とダンサー（W－D），作品と情調（W－FV, W－FV－SC, W－SC），作品と振付者（W－Ch）と多く結びついており，「舞踊作品の実現の機能」を示すとみられる。（発表資料，P.18～24参照）

批評は各機能とも情調とかかわって記述されることが多く，「ほのぼのとした幸福感につつまれた作品」のように作品全体を形容する記述から，「動きはかなり激しいものの連続だが，空間全体は静寂の気で満ちている。」のように，運動の連続を通して出現されるイメージに言及する記述等に及んでいる。

意味微分の〔凡例〕（発表資料 P.3～4 参照）

22—1	からだのどこかに縮んだものをのこしておきながら，スピーディに動く 動き（身体—運動）	22—11	主題の再現は，単純から複雑へと展開してゆく構成であるべきだ。 構成（運動—変化—構成）	22—12	技術が技術として成立するためには，その部分を存在たらしめる全体が明らかにされねばならない。部分が全体をはらみ，またその全体に部分が支えられるという関係が創り出されねばなるまい。 部分・全体（構成—美的形成原理）

特に〝ダンサー〟に対する記述は多義であり，ダンサーに要求される美的形成の用語からは，「切れ味のあるテクニック，ギリギリまでためておきタイミングよく発散させるコツ，ぴたりと決まる動き，存在感を持続させる，振付を与えられれば……自分の舞踊をこしらえる，舞台上に人間の生きざまを出してくる…」等，身体のコントロールから，表現の独自を拓く心身の調整や精神的態度にわたり，「人間性に裏打ちされた技術」として，情調とかかわった運動，即ち〝舞踊運動〟の実現を精緻に求める批評文の特性が認められた。（発表資料，P.26～28参照）

以上の点から，舞踊作品の成立と鑑賞のメカニズムは，批評・紹介記事の意味微分により，仮説的に設定した各要素は機能的に一定の関係をもち，その構造・機能と要素化の図式の妥当性を検証し得たと認められる。

（註）本研究は，昭和55年度お茶の水女子大学人文科学研究科舞踊教育学専攻の「舞踊教育学実験実習」として行ったものである。（松本）

図1．作品—鑑賞の構造・機能

① 運動の要素

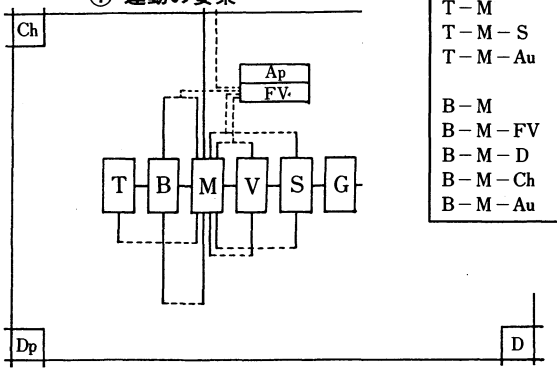

図1．② 構成の要素

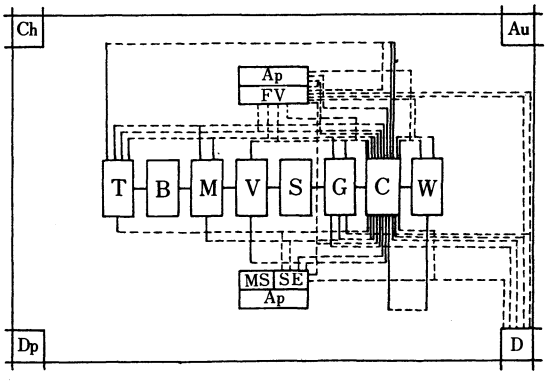

図1．③ 作品の要素

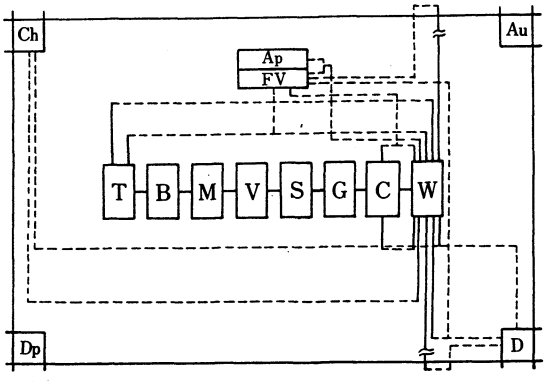

表1．意　味　微　分

T－M	9	B－V	2	M－S－D	2	M－Ap	2
T－M－S	2	B－V－FV	2	M－S－SE	1	M－Ap－FV	1
T－M－Au	1			M－C－FV	1		
		M－V	13	M－W－Ch	1	M－SC	3
B－M	28	M－V－FV	5	M－FV	51	M－FV－SC	1
B－M－FV	19	M－V－S	1	M－D－FV	3	B－M－SC	1
B－M－D	1	M－V－D	2	M－D－SE	1	M－D－SC	1
B－M－Ch	1	M－S	11	M－SE	3	M－Ch－SC	1
B－M－Au	1	M－S－FV	8	M－SE－FV	1	その他	5

（① の 事 例）

T－M	動きはいわば主題から極端に遠い処にあり
B－M	腹部を両手で叩きつけ
B－M－FV	腕の動きが痛快
M－V	静かにゆっくり屈曲するダンス
M－S	常に同じ形で反復
M－FV	ハードな

（② の 事 例）

T－M－C	〝花が散る〟といった動きを増してゆくバリエーションを中軸とした巧みがある
T－C	「オセロ」を：4人の主演者のみによって（他にコロスが登場）その心の葛藤を浮彫りにする
C－V	3人の静かな感じの踊りで始まり，それぞれのソロ，激しい盛上りと続き，短いエピローグで幕となる
G－C－D	彼自身が狂言まわしにまわり，船橋啓子と柳下規夫のコンビが芯になる。それを14人の群舞がかこむ
W－C	前半と後半とに分かれている
C－FV	全体は古典的な構成
C－Ap	全体は四章から成っていて，それぞれがひとつのエピソードを形づくっている

（③ の 事 例）

W－T	この作品は（K）の考えたユートピアの表現なのだと思う
W－C	全体をもう少し刈り込んで作品の構造を強く印象づけてくれればもっと良かった
W－FV	力強さを感じさせた作品
W－FV－AP	典型的なモダンダンスふうの陽気な作品
W－D	（A）と（B）という個性的なダンサーを選んだことが成功の鍵
W－D－FV	実力ある若手ダンサーをたっぷりと配した厚みのある作品
W－FV－SC	ついに日本のモダンダンスにもこういう作品が出て来たなという感じ